



佛經卷之九
海州
完



他諧二十九箇條抄

○排訛乃道とともる也

或人問曰他諧を何乃為ふともる事とや答曰俗語平
活然きくさし、為之又曰他訛の及ともる也何又答佛
道、遠磨あり儒道あり莊子ありて是れ實有哉
踏破なり歌及ふ他諧あり、かくのよと知時、また
及てたふ叶ふの道理とされ、他訛の及ともる、和歌連
歌此次ふまて心を向上の一路と遊ふべし

他諧、世俗の日用の詞を以て日本の事を吟詠する
ハ和歌のみやとす。詞あり、其れと詞、此れ題とす
す、て云語の多し、其れ、此れ、た、い、生、人、品、人、品、さ

日傳一向宗の真あり
春秋心法養麟秘訣

公羊傳曰 顏淵死 子曰天喪予 子路死
曰天祝予 西狩獲麟 曰吾道窮矣 ○
祝者斷也

俳と非の者こそ或は史記の滑稽を引いて俳の字より定むる
と穿鑿乃理を明く彫き古今集より俳の字を引い
て来れど此類を故實とて誤と見らるる用事あること
八雲出抄より俳語と俳社との二條ありされど我家の
俳語と論せし只俳社も古人ありと者破したる眼を
去り妙と名を別定むる言語も遊も俳語
の二字も志るべし他門の對して穿鑿もさるべし

○滑稽といふ
よき言ひ
又賤
又あま
ふくまぬ

俳と俳優雜戲と續て俳優者といふは古くは優と俳
優人を宮中より至て雜戲とせしめられたる賤しき者
こそを此人より近つききより滑稽といひて面白く慰め
しものをも史記滑稽傳の注に滑稽猶俳諧と有

るや此れ
と意を
親しく云
あま
又遣のま
をたふ
和のや
添て和
とて
こ和ま
いふ事
云い

る滑稽者とのいひも俳優者の滑稽の如くといふ事
因人をわけて怒を解く滑稽の議論もさる事外
俳社との二字も俳優者の滑稽と別界したる熟字を
かりき詞の名をかりて俳社の記事は漢土よりあり
事こそ呂與叔の詩の文似相如反類俳是等の事
考へ古今集の俳語歌と記せし俳社歌の事あり
まは字形の似るゝ以て滑稽の事と名をかりて俳の字
と俳の者よりいひあへて滑稽と名をかりしはれりハ
雲出抄の始て部と立て俳語と俳社とを辨別して
二條とせしむる芭蕉翁此の家記の俳語の如くは
只俳社のみあり古人ありと者破せしむる終此
その祖師とありたれど去りて妙と勝子と名を
定められたることを吟句俳社より俳語の字義も
叶ひたれし今の俳語と建立せしむる果して四海



書寫定一紙一才三信子と書き置る其の

原之紙一才三信子と書き置る其の

〇三才一紙中道と書き置る其の

凡才の遠事と書き置る其の

其の事と書き置る其の

あせり又佛を悟故十方は空と現天地世界森羅
万象の皆老若の申の夢幻影泡をせしむる実
は彼老佛の如き人傑の稀の中の稀人なりて再いの
れ稀人を世に出されしと然れども教をすし流を
及てはそをたともる人せし又其多しや
中よ生つふそを侍る人或は又多しや
云ふゆゑにして妙人こそ我家の傳授といふてあれ
翁にこそ老佛の学ふ心をよせられ既して老
佛の門と遊れ風月花鳥を以て生涯とありし
市中の隠道なりて風流家の逸人といふ也

○變化之事

文章と云ふは變化の事なり變化といふは實は自在と云
し黑白善惡の言語のあやうして是を白と云ふは

ふと云ふは暫く言語の變化なりては理きことと云ふは黑白
一合し然れども天地の變化も遊ありし人よ變化せしむ
退屈もさう本情も況俳諧のあれは家ありたり
天地四海をめぐり春夏秋冬は愛も随ひ月花の
風流ありしものあれは口歌の口句も變化し事あり
是も變化を知りては變化も事なり眼の前より
句も連ひて前後の變化もなるといふはこれと變化と云
ふ新古ありし事人間の春秋も新古ありしこと日々
時の新古もなして一巻の變化も遊ありし變化もあはむ
ね料理のしすくあはむかきかき如くもはたす

一物おける時よれ對して又生ると是は眼とて始の一物
定むる字或は請と請上の二物と請の公と生
後句の陽と眼と陰あり先と二と一轉して天地は人
と生るとや一人を天地より働あはれとて天地より
事をなす一合とて万物一合之歌の流る字此公ある
也一是は兼変化して一卷成就とて云こ

此版の爲の論也。処悉く是れを蛇と定む所也。
お似たりと大意をさりと評せんお後句の二と
て歌一首のさぬ又四句を合せて詩の後句の如くこと
也強て解をさせ先と後句の何れも句を限るに
兼句の後句のさぬあると一分立てて地あかたは
是を念おのる空界より一物おこはる處之根は後

○天極兩儀と
生し兩儀之
女とあり四
象成しと
や

句の意は請て兼句の意は定む必一分立てせれまのこ
是有ふし。陰陽乃る理と陽の男ありて陰は女婦の
夫を随ふるやこれと根の身より持てる根はありて
いふを思ひ合も一是一物おける時お對して生す
た友に扱中二の平句より生けさる働あり何所
ありてや身とて見らる。根はさる一とされと後句ふ
くはあれは自ら體制異ありて和文お天地より人
を生むるや一人を天地より働あはれとて天地より
也。事知さる一と此版の意は妙に四句目
第一の二句の意は結ひ合も所ありて結と合と
云こ然して後詩乃後句の四句ありて首尾結し事足り
是是を左ありて天地人の三を此処ありて結ひ合も
又是より流動融通して山川の景色を花月を風情
神祇神教を常とありてさるく変化して一卷
成就の小成あれは後詩の合句の同一とて知す

○後句の切字の事

茶句の切字と云はる列の公に物とし是やふよは是志や
将を明し思ひた客と亭主との列に假令切字ある
後句と云ふ心なきは時、後句の切字は

→桐乃木の鶉啼や。堀之内

此句の文字の公は隔との切字の事、連歌の詮義
あり先と後句の骨柄と云ふ趣

切字ありては列の意味は公のまはれ句の切字にあ
る此桐の木は句の切字あると云ふ又文字の公は
隔てまはれと自ら切字と云ふは切字の口傳あり
章を合せ考へて又切字ありては切字の切字とい

夕の影の秋の句の切字の字切字ありて又其角の句の
→初午や福をさすまの干物哉 此句のやと初物とま
やの口合のやと切字ありて此類尚多く是を初物を
を會得せしむ哉とや哉と云ふは初物と切字あり
と云ふは列ありて何苦し初物と云ふは初物を會得
せむ。初物の初物を初物と云ふは

○脇の切字の事

根と云ふ葉と切字の事、初物の切字の教
定の字のふかふか切字あり

→文くはる急やわつりや春の字
→して蝶の夢をささめはる

此句をささめはる俳諧の意味は尋ふべし俳諧の名目

仮名切字の事、引合て初物と云ふは初物を會得せしむと云ふは初物を會得せしむと云ふは初物を會得せしむと云ふは

紛々として感ひききると生所出よ一棒をわけて群の事を
覺りたる処一句お射して旅入體を散字てよきは
詮議水一となく旅を後句に群情氣文の面白く成す
をまひて後句よひひ残しる。竹木山川の二字二字は
風情を加いて客の餘情を付きなり此旅一旅乃
一字あり尋の歩ひくさるをかん。

起定轉合の章あり云々よく旅を後句の意物法て一分
立せたるのありしつうりて後句の餘情を及ぶ句の意味
の面白くさるる旅もさるる旅に定の字又旅の字を及ぶ

ゆふのしきり趣向を定めぬ旅字は定めの自然に生じぬ
いまあつた旅旅あり事し然れども我 皇和を旅旅
古国ありと後漢士は四聲七音の律呂をききし一管
弦小合せてこゝも詩の如く旅字ありと事かかす
あれんあふちら旅字を用ひつらにけし時其分の時
宜し不随ひ旅の旅のさるふ云ありし。旅の客は位
旅ち亭をその位と云事公とくし何れの家あり客の有
し時あり客の物ありん旅ありあふひもてあきし事
の如く旅の身物持する旅ありん云此の如く

旅 西日のとらりしはまゝ氣あり

旅 梅のよふのつと日の出る山路

旅 是の寺の體製をらんて玩味せんおのつと惜りね

炭俵集

らば俳諧の漢字の教礎を用人事宅の爲に
くは若る俳諧師の物起事の中初稿の八庚の散
の字を以て杜能あり先づ教の字を以てし
あり是等を口傳の極云云と云々やせし海く巧
うしてしゆくはいありと云へ都ら近世の眼
ふと教字を以てしゆくはいありと云へ都ら近世の眼
好む

四句目軽き事

四句を結成し後句ありしと云ふ又事場所
を察ししと云ふ句短く之を以て骨折き故に
人きし句を以て極と云ふと云へ一巻は愛に
此句より始るなる万物一合と云へ注しきと云へ都て

た句より四句目と云へ限るに或る事く或る極く或る
やきし句を以て極と云ふと云へ一巻は愛に
此按ち中品以下は為りし中品以上と云へ此按れ
所以といふ事を以てしゆくはいありと云へ

○詩作連続
の句作工あり
の句作工あり
の句作工あり
の句作工あり
の句作工あり
の句作工あり
の句作工あり
の句作工あり
の句作工あり
の句作工あり

四句目の万物一合の變化のゆくはいありと云へ山川の景
を以て雪月乃風情極き世の有情あり神祕
終極意を以てしゆくはいありと云へ一巻は愛に
と云へ此の趣向は後り愛の糸口ありと云へ
ありと云へ此の趣向は後り愛の糸口ありと云へ
ありと云へ此の趣向は後り愛の糸口ありと云へ
ありと云へ此の趣向は後り愛の糸口ありと云へ
ありと云へ此の趣向は後り愛の糸口ありと云へ
ありと云へ此の趣向は後り愛の糸口ありと云へ
ありと云へ此の趣向は後り愛の糸口ありと云へ
ありと云へ此の趣向は後り愛の糸口ありと云へ
ありと云へ此の趣向は後り愛の糸口ありと云へ
ありと云へ此の趣向は後り愛の糸口ありと云へ

くは若る俳諧師の物起事の中初稿の八庚の散
の字を以て杜能あり先づ教の字を以てし
あり是等を口傳の極云云と云々やせし海く巧
うしてしゆくはいありと云へ都ら近世の眼
ふと教字を以てしゆくはいありと云へ都ら近世の眼
好む

○花少櫻分事

世に志とて海を極る事こと少くあはれ花といふ
物此公乃志こきとて花算を嫁の類余の出をを藤
物のそれやあると生物とて心花あはれ花を賞覧乃
二字ふ定り此より乃志を少く春季より植物ふ
三句去し花を春の發生する物あはれ古より花
少極を附る事傳授ありとて初心よのさうた或極
鯛乃類あはれ花の夜あはれ極下の時も随て附
きこ花あはれ植物と此類を知らしを極あはれ
極あはれさるるやあはれと云事我家に傳授あり

翁の見識本文のやうに花を極る限は凡そ花算
花嫁の類のさうあはれ極を附る事苦しかは又実の
をあら極鯛の類又は地名に極井極本坊あはれ是等
類を附る事んあ何苦しき又極小花の附る事
乃か一花算を嫁あはれ出るあはれ苦しき
只是時乃を略あはれ未て奇異を好むし

○當季抄案もる夏

月花乃句り限るに四季に附句あ其季抄案もる
系の二句軒き時を當季抄捨て趣向も案もる
登之も椰子舞と趣向も定めて乃花あはれ長
刀と趣向も定めて極乃月とあはれ二句字に
時を當季より案もる花算月霞乃類一句乃風情

とせりて此二の業一方の變化の爲なる業論なり
花乃の續き合の軽重ありてこそ所句のそめある業論
せりて此二の業一方の一卷の變化の爲なり
都て一卷をそ一句く面白く變化せりて風俗せり
されし初公の變化を知りて面白く變化せりて事自在
とせりてこそ此の宗道に則ち随ふなり

○二季の波る物の夏

古と二季の波る物と、後乃波る片と云秋の出代と云は
お句は秋の波る時を後れ字なり及んば秋季の此類はま
と有るなり或は節句は二字ある目を波る時を大方植
物の指合あり是又前句乃季の随ふなり西瓜は秋季

よ秋牡丹を夏と云る類は夏季を瓜の類多し
日秋は秋季の日の波るは句は此詞ある時を七句
目は秋の季ありて異名は日ありてみそさといふ秋は小
鳥の入るは冬冬季志なり殊に十月の波るは葉
と夏季ありては葉と云る夏は季の波る雪春
は季の類なり
口傳新式法
面白くは夜分は指合なり其外は此類あり
知りて古式なり此等は鐘の音砧なり
世は事し鐘の音衣なりと云るなり
口傳子タリアリ
さしはよと云るは一座の扱なり

○發句の像中カゲナリの事

發句も屏風に絵と魚の二つに句は作て目録閉て繪
准へてゐる。一死活自ふあゝ部おし此故ふ此世を
姿を先うて情を後かきと云ふ都て發句とて附
とて目録やまきて眼あつる。一公の思ひも案てま
きん仕事に推量し目ふて附ると心あつる。附と
自門地つらさし筆紙うらと一都諸集に改定
たてま又とて

都て發句うて附合ありて是景又は快態は物に眼を
閉て思ひたり細かき有極とる。一鬼神とて感
きんき公とてわづけ又人を驚き程の句と出まるとの

殊に此世を姿を先うて情を後かき連歌といお表裏せり此
も姿ありて情ありて句に精細なく木偶土偶の類情ありて
姿れあつる句の形容なく鬼靈木精の類と知れ又姿態
を先かき風情感懐を合む。一八各月池邊のつら終秋
是各月のつらやき酒り池水も移る有極を句の姿思ひやほし
ねと月あつて終秋池邊をわづけ。一いつく風情の深き景又
感懐ありて人を感せしむ。事限ありて古人の句に落かくのや
推て考へて叔附句にまらあ句にねとら定てまより己の
附句の趣向を觀る。一自も死活題れ句此の變化を自
らある。

○附句案一やうの事

發句も格別の事。附句も生産の際にて情の案
せたりよたて我心ありて此れ趣向ありて家子外よ案

法といふ一一人一此法を二更せし天下此政も明た人間
明なるの働きを知るべきこと 是より末の文 是法よりさし後
終より路に迷ふ事頭然と破る此意を味あし

此執中の二字ハ俳門の秘法ありて只附合の活法と云ふ
あやふし所詔世さよ益ある修りとも是にかりとわれ
詞のあやとんともは想うるに△五體ハ有公附合符起法
道句 白附是こ又拍子色立を入て七名と云こ△八體ハ
其人其場時分時を天相親相面氣是こ△空樓
空層を打と云義し故に空樓と云こ△附方お句のさるふ
似合さるるふくあしと云こ△空樓ハ似合さるるふくあしと云こ
△空樓ハ似合さるるふくあしと云こ△空樓ハ似合さるるふくあしと云こ
△空樓ハ似合さるるふくあしと云こ△空樓ハ似合さるるふくあしと云こ

取合せしお句の意ふかをもつて又考の論よる所を
離れ附の類しとて障子お氣の夕日ちりけりへ毎夜さど
れとと老の目地拭ひお句いとも障子お竹木の影移るひ
を附句いともあしより意物添て世をさ人の立詔くお句
夕日のちりけりお老人の目と拭ひを毎いともあしとて向と定
めり△不傳のめと黙識心通禪家の以心傳心と定こ

○戀句くさ

恋句を古式を用ひしこ一さあを嫁娘おと野郎垣城
文字名目お恋と云こ只昔句の意恋あし文字お
恋かともは恋の意を附しお句お他門お恋を無恋二句を
捨るおと云こ一恋を風雅ハ花実あし二句より五
句より先と二句ありて法陽のそ理を定こるこ是

八家家の發明よりして地門對して穿鑿を盡さず不次

意を風雅の心を笑みして二句より三句を起るとして五句
はまききりんかみ変化ありて一これと陰陽二句を
然る一これと自然と面白く変化し意の意ありて
續ききりんかみの許されりて一此れを更にお苦く
若し俳諧とてと意を文字各目のこと改めしむるあり
ありありこれ宗因の形式ありて一此れを亦か改めしむる
有る山へいふそのみ入るは事きたせは是等ハ詞のよ
あはれ自然と意の情を合ありされと連歌の風調を
まねるは蕉風の俳人を學ぶよりして意を蕉風は後
句を舉げ 猿蓑集より物思ひのありて一此れは日
近ひせし一に及より此れ 是れもあはれは憂き勤め物
思ひも定一趣向より一此れ人より一此れ人あり一此れ
物思ひあり一此れ勤の憂き勤め一此れ方無量の物思ひあり中

小傍事ありの寄合て浮世をわらふとよは物思ひを忘れて有し
あえて来よと情人れをよほて娘一この傍事ありのあはれ
あはれありあはれせしき友の恨れれかとせしむるあり
都て意向き双紙の繪と思ふ一眼を閉て双紙は絵を心よ
思ひも入りんかみか境の境の思ひて自ら趣向を顯
一この作をあ向の意味合して一此れ時其場の傍ありて

○切字の口傳あり事

切字は事と諸集少あり今世は殊に雅量多し
玄妙切丈夫のいふと云ふ切の意は我家やを言て離家
れ一此れは地書ありて一此れは語句とていふるは理と
知得る一此れ三辰切二字切ありて一今世は證句ハ
心得ありてあり

二字切 山さし。ふら。庭や。水は月

三字切 子よ。らよ。音。能。ほ。む。し

三辰切 梅。は。葉。ず。こ。の。葉。は。け。け

或と素堂の鎌倉の吟よ。目よ。ま。葉。山。郭。三。初。う。の。木

と云句。目。耳。口。三。辰。を。明。ふ。さ。う。梅。は。葉。け。け。の。さ。り

三辰を名。一。殊。の。二。字。切。の。字。切。を。一。句。の。内。に。や。と。て

い。う。め。と。類。ひ。わ。ら。し。と。も。の。さ。も。い。の。字。同。意。を。切。二。所。に

或。ハ。二。句。の。目。と。今。や。さ。る。と。と。啼。鶴。と。の。句。を。と。の。字。を。て

あ。さ。く。さ。ん。と。は。の。字。に。切。あ。ら。は。此。類。多。く。あ。る。諸。抄。に

あ。さ。く。字。の。一。字。を。註。美。し。一。切。字。を。百。あ。ら。う。切。此。事。後。也

或。と。ハ。夕。影。や。秋。乃。つ。ゆ。と。類。ひ。云。句。ハ。夕。影。や。秋。と。句

讀。を。切。て。ハ。の。字。を。て。わ。ら。し。と。も。切。字。を。あ。ら。は。此。類。を。口。合。と。て

捨。や。と。云。此。類。尚。多。う。一。梅。乃。也。や。む。時。国。の。後。月

是。中。の。切。と。い。ふ。や。む。時。を。何。と。て。海。国。の。後。月。表。は。と

中。の。句。は。残。り。の。句。法。を。あ。ら。は。る。人。を。初。末。の。と。讀。と。る。歌

此。類。し。一。我。々。家。族。人。の。賞。せ。て。年。忘。是。は。接。接。切

と。い。ふ。一。句。の。自。然。の。事。刻。ある。故。に。此。二。の。切。々。家。家。此

を。明。し。て。地。所。の。句。ハ。沙。法。は。さ。う。う。に

此外あるを思。一。と。云。昔。の。御。指。より。有。一。又。新。製。六。句。後。の。切。ハ。公。の。切。ハ。名。名。の。切。あ。と。さ。く。の。切。あ。是。等。ハ。各。目。の。切。れ。と。い。ふ。れ。と。前。の。論。せ。さ。る。処。あ。れ。と。爰。ハ。論。自。然。事。也。

を思ふ一末くす友をさる月の客 白渡切上志願
佐夜の中山あて添め心切上右とある喻よけ也と云日乃月
を名切へ名月のむととて綿畠を名おゆ流の抄はせさ
おれおれとて社をわかれ事しと一ありそ大急後心好
くまうとて苦しくはあふちあ末てとあふあは及

○指合の事

此は指合の事いとも草此類下随く一少の新

古此事ありされと一社の了管あり初め随くゆき

一句の好悪を論して指合の後の詮義ある一指合と

てにまける事し去廻る變化の爲と先生を名をわく一変

化のふ自在より指合去廻の程あり第の法式を此境をわ

考本万物とアリ
ておまけの指合の云々のあやのほくあまきを辨ありし多物乃
去廻る一巻の變化を面りせん考此等の事古抄の言

抄御筆をいれ草新式等を見て知れある一されと新古
のこま界をいといり一き事あれたの識者お問一

○幸崎此松乃句の事

「幸崎此松を花と棠樹あり 此後句乃花の意を去れ

後句も花と平句のよと別を知し後句を一句の中曲節

と云事あり此句お花と也なりて松乃滝と云節は也節乃

二を尋なれ楓洋獨理なり 考本可記あり一幸崎此松を花乃

杖撞あり是を也とせざるに此句平句より重き処を松

乃樹と云節に「幸崎乃松を花の杖乃樹とて是はさ

なれ氣文 考本のありてし也なりと云事いよのし此句は中間の留

考乃居るに於て詩家とよめる

是と云ふ句は云取と歌乃あふと云ふるよりかゝるありと
改るるに此類もあ句乃知と起してこゝあるより云れり
の牝物比具と云ふも或は前句と軍書と能狂言
乃ありしと云ふ洋猫理あとの相子と云ふ尚く夢ありき
起情なり 八番近う撰乃小呂を挽く〇て八片元山
考本の月をさるるは 是き前句乃あ文字は古代に歌乃さる
とすありて凡そ歌乃讀るるに或は平句乃或
留る限るに此類も子細あり又と撰振を好む歌
求て心をもまゝに作意なり

是を〇神を月なる海川をり具とあふありて
八振堂乃てあふありき〇のを撰る 八階てい
新地岐を時の文二ありて孤屋乃作の
撰集ニアリ 〇番近のと云詞と万葉社の歌と
昔匠と音あよきたるの歌の詞とす
そくこれに訓を讀ぶよと云ふと直に
る形もて公事ハ女わきて俳句ハ婦
あつたれとて漢譯ハ訓ありて
款のさるるに

〇七月闇乃句は夏

或時歌仙乃裏の七句目

青雲をわたりて神乃宮遷

心乃奈秋乃風とよむる

考本ニ青雲をわたりて神乃宮遷ハ此中ナリ

宵の旅の幅綿

光る月闇の月を照らす一打越の殊なる一十句目
と云はれおの延てを念あはれ三句は意の月を特せて八
月乃月字の字の候と云ふ一は一日をあらはしき。こ是は一
夜の夜と云ふ一を月を言ふ月と云ふ思ひありに少の三句取合
せし月字の候と云ふ一

三句を合せては成の竜きりといふ句を一意の解を下
せし八月九日後の事なり一を月言ふは遷に云ふは神と
あり田舎の夜なるは母あるふ此おの夜を暑く退き登
くにあはれ実ふ恰好の時をあらはしよりとよききり杖
乃風さく面ふく痛快なりといはれた風情こそよきよき
友誼の金や小幅綿にておの夜の快くお母のけき

かゝりの遷言の候はけりてあはれ一足止か一と思ひて
時を移し一日の出るお騒ぎを教へ更きり心さすは連月
乃出立ぬおお連きける候情あはれと且一日の日のまは
らん一の候あり実ふ宗匠の候と云ふ一とされしは是言れ
伴と云ふのちきやとくは事少やとくは一日の日の定
九の二二句およりと略して遣ふ花遣ふ月夜なるは
初学の句はと云ふ一一日の夜句の時表の月の定なり
と略ありと云ふ一

○名所小雑乃句は夏

名所乃夏句と云きて雑の句と云ふ一と名をいひきり
夏候の時ち句作必ありあま

あまよまを雑まら嶋と片心

からあつて杖突板を落馬哉

蝸牛の角ゆりよんよ次磨明石

背河須磨明石乃句々蜜觸れ両国小碓入(之後も海)

わくわく。洞より思ひよせまをぬぬ。蝸牛乃書面季は

かゝるは是等と雜の體を云々名所の句は格式ある。一

口傳猿の面

のイアリ

名所の名所の風光を自より趣向ある。又夏目景信と季字節と
を云合をんともいふ。是事多端ありて混雜。其く彼心録
て洞きりてはと云うやく。云々此れ事多う。一。加ふ名所を
必四季の節季あかいつに雜のな句をささる事。此定ぬ
られき。此節千古れ後明ありて永く蕉門の格式。此半
り物。初めを名所より季字のあき。な句をせん事。いふか
とあかき。ぬ節季を和ん。とある。な句作のきく。愛ふ及
よき句を詠。此事類。さし。翁の提のやく。名所。雜
のう。て。よ。と。知。也。

○假名はらひの事

学定家郷の假名はらひ。このあはあま。事志は

まはれて。知。う。昔。名。假。名。は。ら。ひ。の。珍。義。は。後。乃

事。あ。れ。し。又。染。志。の。得。入。あ。る。事。し。さ。し。は。仇。諧。は。さ。む。ふ

と。あ。つ。あ。る。書。お。季。の。り。さ。し。あ。つ。う。と。書。て。な。假。名。志

乃。經。文。あ。と。ら。ん。ゆ。う。あ。つ。し。此。類。は。知。あ。る。事。し

い きく 鯛鯉類

○の字、上カ月、字あはれし。知。い。わ。ぬ。時
ハ下カ月。こ。日。異。アツキ。の。處。廿。廿。類。し。

い ひ 葵雛類

○洞のちあ。あ。の。字。に。疑。ハ。よ。い。ひ。物。あ
る。事。し。の。う。り。た。又。人。あ。物。あ。る。と。あ。ひ。た。り
と。あ。ひ。物。あ。る。事。し。の。事。と。あ。あ。ひ。の。時。ハ。を。中。カ。月

或ハひねふとひひれとひひれを仮名の序書といふなり

ひひれの時ハ

ひひれ中ハ

を
としふ山をり

ハ
おとここれり

ハ
おとここれり

ハ
おとここれり

ハ
はと因一上下あり

ハ
はと因一上下あり

ハ
上ありの痛時ハあり

ハ
洋梢の類或ハ木と書

ハ
中のえ消キユル杖笛机

ハ
更衣カハ

ハ
和ありあふの類ハ

ハ
ハ
ハ

ハ
ち
ハ

ハ
法師
ハ

ハ
雑
ハ

ハ
執の類の字ハ

ハ
此類ハ

ハ
耳ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

此書之思乃後名之識者小者一也其心也

右新式二十五條自家之節目也元祿甲戌
六月自書於舊栢舎而與去來熟讀之可
明自己之俳諧豈敢許令傳寫於他人乎

芭蕉庵

枕青

俳諧二十五箇條終

昔維慶應二歲次丙寅年冬十月念一日

七十四叟

芭蕉

梅之書



